

聖書日課 『からし種』 24.12.29-25. 1.5

<p>12月 29日 (日)</p> <p>アモス 4章</p>	<p>「イスラエルよ、お前は自分の神と出会う備えをせよ」(12節)。この4章には「しかし、お前たちはわたしに帰らなかった」という言葉が5回も繰り返されている。「立ち帰ってほしい」という願いが裏切られ続けても、なおイスラエルに語りかける神の心の内を想う。礼拝は、私たちが自分の願いを吐露するだけでなく、神の思いを受けていく時であることを覚えない。</p>
<p>30日 (月)</p> <p>アモス 5章</p>	<p>「まことに、主はイスラエルの家にこう言われる。わたしを求めよ、そして生きよ」(4節)、「善を求めよ、悪を求めるな／お前たちが生きることができるように」(14節)。アモスにとって信仰とは「生きる」ためのもの。ただ生きればよいのではなく、「神に向かって生きる」ために必須なもの。今のわたしは、神に向かい、神を求める生き方ができているだろうか。</p>
<p>31日 (火)</p> <p>アモス 6章</p>	<p>「万軍の神なる主は言われる。わたしはヤコブの誇る神殿を忌み嫌い／その城郭を憎む」(8節)。北イスラエル王国は豊かな繁栄を享受していたが、神の正義と恵みに背を向けた現実があふれていた。ご自身が愛情を注ぎ続けてきたヤコブ(イスラエル)を厳しく撃たざるをえない神の深い悲しみの言葉を読みながら「神の目に映る自分自身の姿」を厳しく問われる。</p>
<p>1月1日 (水)</p> <p>アモス 7章</p>	<p>「主なる神よ、どうぞ赦してください。ヤコブはどうして立つことができるでしょう／彼は小さいものです」(2節)。アモスが懸命にヤコブ(イスラエル)を執り成したように、わたしたちのために懸命に執り成してくださる主イエスを想う。新しい年、主が加えてくださる新しい日々は、自分だけの足跡ではなくインマヌエルの主の足跡があることを覚えて歩みだしたい。</p>

聖書日課 『からし種』 24.12.29-25. 1.5

<p>2日 (木)  アモス 8章</p>	<p>「わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく／水に渴くことでもなく／主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ」(11節)。「飢え」という言葉をほとんど聴くことがなくなったように思うけれど、私たちの国で「飢え」に耐えながら涙する子どもが多い現実を知らされる。このような「飢え」をつくり出している私たちの「心と信仰の貧しさ」が問われている。</p>
<p>3日 (金)  アモス 9章</p>	<p>「天に高殿を設け／地の上に大空を据え／海の水を呼び集め／地の面に注がれる方。その御名は主」(6節)。一年のはじめに心を天に向けて、創造主なる神の大いなる働きを思い巡らしたい。この大きな空の下で、自分はなんと小さな存在なのだろうか。その小さな一人ひとりに命の言を手渡すために小さく低く生まれてくださったインマヌエルの主を感謝。</p>
<p>4日 (土)  オバデヤ</p>	<p>「主の日は、すべての国に近づいている…お前の業は、お前の頭上に返る」(15節)。エドムは、ヤコブの双子の兄エサウの子孫。聖書ではイスラエルに敵対する「悪役」である。預言者オバデヤはエドムの傲慢と滅亡を語るけれど、主イエスの十字架は隔てと敵意の壁を壊されたのだ。エドムはもはや「悪役」ではなく、共に神の救いを求める「同志」と知らされる。</p>
<p>5日 (日)  ヨナ 1章</p>	<p>『「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった」(2・3節)。アッシリアの首都ニネベへの預言を主に託されたヨナ。しかし、彼は異邦の民への預言を拒み、逃げ出した。主のみ心ではなく、自分の思いを優先するヨナは誰の心にも住むのではないか。</p>